

## <事例報告>

[2020オリンピック・パラリンピック研究班]

# デフバスケットボールの現状と課題について

齋藤 利之

## 1. はじめに

デフバスケットボールは、聴覚障がい者を対象にしたバスケットボールである。日本国内においては、日本デフバスケットボール協会（JDBA）がその運営にあたり、国際デフバスケットボール連盟（DIBF）が競技規則の管理や競技普及の活動を行っている。また、国際ろう者スポーツ委員会（CISS）が主催する聴覚障がい者のための国際スポーツ大会をデフリンピック（Deaflympic）といい、1924年にフランスのパリで夏季大会が開催、1949年には、オーストリアにおいて冬季大会が開催された歴史ある大会である。この大会は、障がい者スポーツの中でも最も古い国際大会で、E. Rubens-Alcais（フランスの聾者）の尽力により、サッカー、水泳、自転車などの5つの競技が行われ、9カ国145名が参加した。そして、2001年5月16日に国際オリンピック委員会（IOC）の承認を得て、名称をデフリンピックとした<sup>1)</sup>。

一方、日本は1965年の第10回大会（米国：ワシントン大会）から毎回出場している<sup>2)</sup>。バスケットボール競技は、1985年からデフリンピックの正式種目として採用され、それを受け1997年に前出の日本デフバスケットボール協会が発足している。尚、デフリンピックへの参加資格は、両裸耳の聴力損失が55dBを超えた聴覚障がいを有し、且つ全日本ろうあ連盟登録者で各競技会において好成績を残し当該団体から推薦を受けた者である。また競技中は、補聴器・人工内耳を使用することが禁じられている。

この様に障がい者スポーツの国際大会としては歴史ある大会であるが、日本国内においてはその認知は低いと言える。特にバスケットボールは、パラリンピック競技でもある車椅子バスケットボールが花形競技であり実力もあるため度々メディアに登場するが、デフバスケットボールと知的障がい者バスケットボールの認知度は決して高いとは言えない。また、国内のデフ

リンピック全体の認知度は、内閣府の調査によるとパラリンピックの94.0%に対して2.8%と極めて低い現状がある<sup>3)</sup>。

そこで、本稿では今後のデフバスケットボールの発展の一助となるために、これまでの活動を整理し現状を把握する事を目的とした。

## 2. 聴覚障がい者バスケットボールの概要

### 2-1 国内における組織及び沿革について

1997年に「日本ろうバスケットボール協会」を設立し、2004年に団体名を「日本デフバスケットボール協会」に改称した。翌年の2005年には特定非営利法人格を取得し、団体名を「特定非営利法人日本デフバスケットボール協会」に再改称。その後、2010年には「公益財団法人日本バスケットボール協会の認定団体」として調印を行った。現在、会員数は毎年180名前後で推移（男子約15、女子約5チーム）しておりエリアにおいて偏りがある。その結果、バスケットボールをやりたくても近隣（都道府県）にチームがない所が多数存在する。その対策として、デフバスケットボール選手権大会の開催地を可能な限り全国各地で行い、それらの情報を当協会ホームページ等において周知し、また周辺自治体や企業等に協力・協賛・告知等をお願いするなどの啓蒙活動を行っているが、現在の所、思うように競技人口が伸びていない。そして、競技人口を増やすためにも、チームを運営してくれるスタッフの確保が重要なポイントになり、競技者の発掘と合わせてスタッフの発掘も、関係各所と連携しながら平行して行う必要がある。

### 2-2 ルールについて

基本的に聴者と同様のルールであり、国際バスケットボール連盟（FIBA）のルールに準じて国際デフバスケットボール連盟が競技規則の管理や協議の普及等の活動を行っている。日本では日本デフバスケットボール協会（JDBA）が運営し、試合時間は10分のピリオドを4回行う等、通常のバスケットボールと同様である。しかし、国内においてはミミリーグ<sup>註1)</sup>のように聴者と聴覚障がい者が一緒にプレーが出来るよう変更し、特にファールのジャッジに関しては、これまでも多くの取組み（工夫）が行われてきた。例えば、①審判に白色や黄色の手袋を着用させ見やすくする（写真1）②コートの対角線上（計2名）に審判のジャッジを補助するための補助審判を配置（主にファールを知らせる）③ゴールの上に回転灯（パトライト）を置く等を実施し、視覚的に選手が素早く判断できる様な工夫がなされてきた。しかし、これらは国内の大会に限ったことで国際大会では行われていない。しかも、国内の大会においても必ずしも



写真1 白い手袋を着用（審判）

①～③が実施されている訳ではなく、むしろ近年はそれらの補助機能は失われつつある。例えば、2014年に開催された、第48回全国ろうあ者体育大会（バスケットボール競技は、第15回目にあたる）のバスケットボール競技実施要項第13条において、

- ① 審判等の笛を知らせる為に、バックボード上にパトライトを設置する。設置出来ない場合は、コート各コーナーにフラッグ要員（黄色または目立つ旗）を配置する。
- ② 準決勝からは、（公益財団法人）日本バスケットボール協会公認A級審判員、もしくはそれに準ずる審判員を配置する。

と定められている。つまり、準決勝からは、2名の審判のみで行われる。

### 2-3 2015年の活動予定

日本デフバスケットボール協会は、年間を通じて様々な活動を行っている（表1）。その活動は、大きく3つに分けられ、1つは日本代表（男女）の強化および国際試合の実施、2つ目は、国内大会の運営実施、3つ目は、普及・啓発活動である。特に国内大会の運営実施に関しては会場の確保が課題であり、毎年様々な所で開催し選手側の負担も否定できない。今後、スポンサーの確保も含め安定した運営が望まれる。

表1 年間活動計画

実施日	活動内容	場所
2月21日～22日	第13回全国デフバスケットボール選手権大会	滋賀県
3月28日～29日	日本代表強化合宿（女子）	大阪府
4月4日～5日	日本代表強化合宿（男子）	福島県
4月12日	愛知県聴覚障がい者体育大会	愛知県
5月2日～6日	日本代表強化合宿（女子）	福岡県
5月23日～24日	日本代表強化合宿（男子） 日本代表強化合宿（女子）	大阪府
5月30日～31日	東日本大会	横浜市（横浜ラポール）
6月13日～14日	第1回九州デフバスケットボールフェスティバル	福岡県
6月20日～21日	日本代表強化合宿（女子）	大阪府
6月27日	関東ろうあ者体育大会	さいたま市
7月4日～12日	第4回世界デフバスケットボール選手権大会	台湾（桃園）
8月16日	デフバスケット体験教室	大阪府
9月19日～20日	全国ろうあ者体育大会	京都府
10月3日～11日	第8回アジア太平洋ろう者競技大会 （アジア太平洋地区予選）（日本代表男子）	台湾
11月7日	東日本大会	東京都東久留米市
12月26日～27日	第2回JDBA 理事長杯	東京都他

### 3. 聴覚障がい者バスケットボールの大会

#### 3-1 全国デフバスケットボール大会（通称：ミミリーグ）

当該大会は、聴者と聴覚障がい者が一緒に参加できる大会で、コート内に5名中2名の聴者を出場させることが出来る。発足当初は、聴者との交流により発展・啓発を目的に底辺拡大を図ってきたが、年々、参加チームの増減が毎年課題として挙げられる。他方、車椅子バスケットボールは、パラリンピックに代表されるように、これまで障がい者（肢体不自由）が行うものとしてきたが、近年では、R大学などが中心となりサークル等を2006年に発足し、聴者が車椅子を使用してバスケットボールを楽しむという新しいスポーツライフを構築している。

ミミリーグは、2002年にプレ大会が大阪市で始まり、その後2003年（第1回）の名古屋市での開催を皮切りに、2015年（第13回）は、2月に天津市での開催が行われ、男子14チーム／女子6チーム（約170名）で開催された。また2011年（第9回）の開催予定地は福岡市であったが、東日本大震災により中止となった。（表2）

表2 全国デフバスケットボール大会

2002年	プレ大会	大阪府大阪市
2003年	第1回	愛知県名古屋市
2004年	第2回	神奈川県横浜市
2005年	第3回	大阪府大阪市
2006年	第4回	愛知県豊川市
2007年	第5回	埼玉県所沢市
2008年	第6回	長野県長野市
2009年	第7回	京都府京都市
2010年	第8回	宮城県白石市
2011年	第9回	(福岡県福岡市 東日本大震災により中止)
2012年	第10回	兵庫県西宮市
2013年	第11回	福岡県宗像市・岡崎町
2014年	第12回	千葉県千葉市
2015年	第13回	滋賀県大津市

### 3-2 全国ろうあ者体育大会

全日本ろうあ連盟主催による大会。全国のろう者がスポーツを通じて技を競い、1年に2回、夏季（毎年9月）と冬季（毎年2月）に開催している。2014年の夏季大会は9月に沖縄で第48回大会が行われ、「野球」「卓球」「バレーボール」「陸上」「サッカー」「テニス」「ボウリング」「ソフトボール」「バトミントン」「バスケットボール」の10競技を実施した。また、冬季大会は2014年2月に栃木で第42回大会が行われ「スキー」「スノーボード」「ハーフパイプ」の3競技が行われた。尚、それぞれに参加する競技団体は、参加出場回数（参加開始時期）が異なるためデフバスケットボールは、第15回目の位置づけで行われた。尚、第16回大会（2015年）は、京都府で第15回大会同様に10競技が行われた。（表3）

### 3-3 国際大会（世界選手権）

世界デフバスケットボール連盟主催による世界デフバスケットボール選手権大会は、2002年にギリシャで始まり、2015年の台湾（桃園）で行われる大会で4回目となる（表4）。また、国際大会への参加条件は、聴力（聞こえの良い方の耳）の平均値が55db以上であることが決められており、その目安として、身体障害者手帳（聴覚）が4級以上であれば参加登録が可能であるが<sup>註2)</sup>、競技中は、補聴器の着用を禁じており、耳に頼らないコミュニケーション能力が求められる。尚、これまでの3大会の結果は以下の通り（表5）。

表3 全国ろうあ者体育大会（過去10年）

	全体	バスケットボール	開催地
2005年	第39回	第6回	長崎県
2006年	第40回	第7回	栃木県
2007年	第41回	第8回	岡山県
2008年	第42回	第9回	大阪府（大阪市）
2009年	第43回	第10回	福島県
2010年	第44回	第11回	徳島県
2011年	第45回	第12回	愛知県
2012年	第46回	第13回	千葉県
2013年	第47回	第14回	富山県
2014年	第48回	第15回	沖縄県
2015年	第49回	第16回	京都府

表4 日本選手団が参加した国際大会

	大会名（場所）	派遣者
2000年	第6回アジア太平洋ろう者競技大会（台湾・台北）	男子日本代表派遣
2001年	第19回デフリンピック（イタリア・ローマ）	男子日本代表派遣
2002年	第1回世界デフバスケットボール選手権大会 （ギリシャ・アテネ）	出場なし
2005年	第20回夏季デフリンピック競技大会 （オーストラリア・メルボルン）	男子及び女子日本代表派遣
2007年	第2回世界デフバスケットボール選手権大会（中国・広州）	男子及び女子日本代表派遣
2009年	第21回夏季デフリンピック競技大会（台湾・台北）	男子及び女子日本代表派遣
2011年	第3回世界デフバスケットボール選手権大会 （イタリア・パレルモ）	男子及び女子日本代表派遣
2012年	第7回アジア太平洋ろう者競技大会（韓国・ソウル）	男子日本代表派遣
2013年	第22回夏季デフリンピック競技大会（ブルガリア・ソフィア）	男子及び女子日本代表派遣
2014年	第2回 DIBF アジア太平洋クラブ選手権大会 （フィリピン・マニラ）	男子・福岡エンペラーズ／ 女子・東京 VAMOS 出場
2015年	第4回世界デフバスケットボール選手権大会（台湾・桃園）	男子及び女子日本代表派遣

表5 第1～3回までの世界デフバスケットボール選手権大会の順位

		優勝	準優勝	3位
2002年	男子	ギリシャ	アメリカ	スロベニア
	女子	アメリカ	リトアニア	ギリシャ
2007年	男子	リトアニア	ギリシャ	アメリカ
	女子	アメリカ	スウェーデン	ギリシャ
2011年	男子	リトアニア	ベネズエラ	ウクライナ
	女子	スウェーデン	リトアニア	ウクライナ

注：2007年，日本代表初出場．男子：8位（16カ国中），女子：8位（9カ国中）

2011年，日本代表出場．男子：14位（14カ国中），女子：8位（8カ国中）アメリカ不参加

#### 4. 活動予算

日本パラリンピック委員会（JPC）は，加盟競技団体（全64団体内，41の個人競技と21の団体競技の競技団体）に対し，国庫補助「総合国際競技大会指定強化事業」を原資とし強化費を分配している．平成27年度は，2016年のリオパラリンピックの前年度ということもあり，ランク毎に100万円上乘せ（前年度比）し，国際大会への出場確保並びに優秀な成績を上げるために必要な活動経費について配分を行った<sup>4)</sup>．

##### 1) 基礎配分（競技団体評価ランクによる配分）

加盟団体の競技実績（最高88点），強化活動の実施状況（最高12点）を100点満点で評価して強化費を配分

##### 2) 重点配分（パラリンピック出場・メダル有望競技・種目に対する重点配分）

特に優秀な成績を見込める種目，競技について追加配分を行う

一方，競技団体評価ランクと配分上限金額は以下のようになっている．①特A：81ポイント以上⇒16百万円 ②A：61ポイント以上⇒13百万円 ③B：46ポイント以上⇒9百万円 ④C：31ポイント以上⇒7百万円 ⑤D：16ポイント以上⇒5百万円 ⑥E：15ポイント以上⇒4百万円．さらに，パラリンピック実施の団体競技の，上限は1.5倍となる．

以上の基準のもとに，平成27年度のデフバスケットボールへの評価点合計は，それぞれ男子が27ポイント獲得でD評価（5百万円），女子は52ポイント獲得でB評価（9百万円）であった．評価点の内訳は，男子は，競技実績評価領域21ポイント，強化活動実施領域（基礎点）6ポイント，加対象資格者0ポイントで，計27ポイントであった．一方女子の内訳は，競技実績評価領域44ポイント，強化活動実施領域（基礎点）6ポイント，加対象資格者2ポイント

で、計52ポイントであった。尚、競技実績評価領域の加点対象となる競技実績評価対象大会は、男女とも「ソフィア2013」であった。また、同様の評価基準における他のバスケットボールの平成27年度の強化費は、車椅子バスケットボール男子が、C評価（7百万円）、女子がD評価（5百万円）、いずれも競技実績評価対象大会は、ロンドンパラリンピックであった。また、知的障がい者バスケットボールは（男女まとめて）、E評価（4百万円）であり、競技実績評価対象大会は、2010年世界選手権大会（ポルトガル）であった。

また、評価基準の88ポイント（88%）を競技実績評価対象大会（国際大会）における実績に基づいて配分されるため、国際大会へ出場し入賞することが如何に重要であるか分かる。しかしながら、多くの団体競技は、一回の海外遠征（大会）に莫大な資金を必要とするため、資金の確保に苦慮しており、例えば知的障がい者バスケットボールは出場さえしていない状況だ。

また、わが国の障がい者スポーツを統括している公益財団法人日本障がい者スポーツ協会（以下JPSA）は、各競技団体の行う強化活動に関する助成団体を次の通り定めている。

- 1) 肢体不自由、視覚障がい関連競技団体
- 2) 聴覚障がい関連競技団
- 3) 知的障がい関連競技団体

いずれも日本パラリンピック委員会加盟の競技団体である。

## 5. 選手の確保（人材発掘）

タレントの発掘は、大きな問題の1つである。高い競技力を追求するためには、ジュニア時期からの継続的なトレーニングが必要となるが、現在、120校もの特別支援学校（区分：聴覚障がい）において、バスケットボール部があるのは、北海道と福岡県に2校のみである。その大きな背景として2つ考えられる。1つは、特別支援学校における部活動の活動状況である。デフスポーツの発展は、特別支援学校（聾学校）における部活動に影響している。普通校と比較して、生徒数が少ない特別支援学校の場合、団体競技は限られたものになるが、以前から野球、バレーボール等、他の競技の活動はあったが、展開の速いバスケットボールを取り入れている所は殆どなかった。それ以外は、陸上や卓球等の個人競技、もしくは団体であっても少人数で対応可能な競技が部活動として取り入れられることが多かった。

もう1つは、競技の特性と聴覚障がい者の特性にも大きく関係している。バスケットボールは、攻守の切り替えが早く、コンタクトスポーツであるが故に、相手に対するファール（反則）が存在する。このファールの判定は、審判に委ねられるのだが、聴覚障がい者は、この判定を

素早く認識する事が難しい。一方、バレーボールは、ネットを挟んで行われるため、原則、相手とのコンタクトは存在しない。それどころか、自陣のコートに入ってから3回以内に敵陣コートへ返球するという明確なルールが存在するため、ゲームの流れを視覚的に判断することが出来、必要なコミュニケーションをとることが、バスケットボールに比べると比較的容易である点だ。

つまり、特別支援学校においてバスケットボールを行う環境が整っていないため経験者も少なく、その結果、人材（児童・生徒）を紹介してくれる先生も少ない。また、その前提として、競技の特性（危険性等含む）からも敬遠される傾向にあるため、ジュニア期からタレントを発掘するのが困難であることが分かる。

一方、特別支援学校以外に特別支援学級や通級による指導において教育を受けている難聴児も存在する。これらの児童・生徒は、聴者とともに部活動を行っているため、比較的経験が豊かである。但し、聴覚障がい者として各大会等に出場できる資格を満たしているか否か微妙なケースがあるため、これらの児童・生徒がすべてスカウトの対象になる訳でなく、且つ、経験豊かな難聴者は、デフバスケットボールよりもむしろ聴者と共に活動を行っているケースが多い為、仮にデフバスケットボールの資格対象者であっても、その様な情報が入って来ないという現状があり、現実的に彼らを見出すことは困難である。

## 6. 課題について

### 6-1 コミュニケーション面

今回のソフィア2013大会では、すべての選手が手話を使用することが出来、選手間同士のコミュニケーションは比較的円滑に行われたが、仮に上記のように有望な選手を通級による指導（教育）を受けている難聴児からのスカウトが可能になると、逆にチーム内において、手話が出来る者とそうではない者とが混在し、コミュニケーションが複雑化することになる。実際、過去においてそのような事例が数多く見られた。

次に、指導者とのコミュニケーションの取り方である。現在、女子日本代表は、ソフィア2013大会前までは、協会関係者がヘッドコーチを兼務しており意思疎通は円滑に行われていたが、逆に世界と戦うためのバスケットボールのより高い専門性が必要と感じ、大会終了後には、専門家（聴者）を招聘し技術力向上を図ることとした。その結果、合宿等で様々な分析や練習メニューの改善・充実は可能となったものの、コミュニケーションは手話通訳者を通じて行われることとなり（写真2）、より効果的なタイミングで選手に助言できるようにしているが、試合



写真2 (監督とのコミュニケーション)

展開の速いバスケットボールにおいて、試合時における発信力の困難さが懸念される所である。今後は、日本代表OB・OGをコーチとして育成し登用する等の方法も検討材料となっている。また、中村(2009)は、デフリンピック選手候補者を対象にアンケート調査を行い、当該選手たちは競技力向上のために聴者または手話の出来る聴者のコーチに指導を受けたいと半数以上が回答していることを示している<sup>5)</sup>。

他方、協会スタッフの殆どが聴覚障がい者であるため、特に外部の関係者へのコミュニケーション手段はメールが主となり、電話と違い即答性が無いため、対応に時間を要している所が多い。

## 6-2 環 境 面

現在、当協会内において、公認審判や指導者で資格を取得している者はほとんどなく、デフバスケットボールの底上げのためには選手だけではなく、審判や指導者の資格取得を推進し、また協会としても資格取得できるようにバックアップをする必要がある。尚、JPSAは、スポーツ指導者コーチの講習会を年に2度ほど開催しており、手話通訳者もその講習会には常駐しその普及に努めている。また、公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会公認「障がい者スポーツコーチ」の登録状況において、聴覚障がい者関係の推薦を受けて、「障がい者スポーツコーチ」となっている方は、139名中2名(1.4%)であり、いずれも、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会(水泳)である。更に、公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会公認「障がい者スポーツ医」の登録状況において、耳鼻咽喉科を臨床面での専門にしている医師は、275名中5名(1.8%)と極端に少ない<sup>6)</sup>。そのようなことを考えると、選手だけでなく周囲の環境づくりも急

務であることが示唆される。

### 6-3 資 金 面

他の障がい者団体同様に全般的に資金が不足している。また、直近では、国際デフバスケットボール連盟より日本でも大会を開催するよう指摘され、2016年にアジア太平洋クラブカップを日本で開催する予定だが、財政面において引き続き難しい状況である。つまり、選手の強化費用や遠征費用の問題だけでなく、その他のインフラのための費用確保も平行して取り組まなければならない。その為には、会員や会費以外からの助成金、定期的に資金を援助していただけるスポンサーの確保等が最重要事項でもあるが、すべてのスタッフや役員は、本業と兼務しながらの事務作業のため（専任スタッフの不在）、現状はそうした動きが十分に取組んでいないし、一部のスタッフの負担が大きく疲弊していると言える。また、選手に関して言えば、本来は実力的に代表として召集したいが、個人の負担が大きく、財政面から辞退する選手もいる。

## 7. 今後に向けて

2020東京オリンピック・パラリンピック大会開催に向け、少しずつではあるが着実に障がい者スポーツに対する社会的認識の高まりや協力体制の構築は起こっている。例えば、平成27年度予算（文部科学省）では、味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）<sup>註3)</sup>の拡充整備として新規に98,452千円が計上されている。更に、2020年や2020年以降に向け、トップレベル競技者が、集中的・継続的にトレーニング・強化活動を行うための拠点施設である同施設は、オリンピック競技とパラリンピック競技の共同利用化等による機能強化を図っている<sup>註4)</sup>。一方、デフバスケットボールはパラリンピック競技種目ではないが、障がい者スポーツの一翼を担う存在として、まずは競技力の向上に努める必要がある。その理由として、2015年7月に台北で行われた大会では、男子は参加13チーム中12位、女子は参加10チーム中9位という結果に終わった<sup>7)</sup>。男子の優勝国はリトアニア、2位はアメリカという結果であった。女子の優勝国はアメリカ、2位はリトアニアという結果であった。両国とも日本との対戦では、大差をつけて勝利しており、体格に劣る日本の更なる競技力の向上が急がれる事が浮き彫りとなった。国際的に通用する競技力の向上は、当該競技の魅力や話題性にも寄与し（メディア等で取り上げられる等）、その結果として障がい者スポーツ全体への波及も期待できるからだ。そして、前述の通り、様々な問題や課題が山積する中において、中長期的視野に立ち運営を進めていく必要がある。何故なら、デフリンピックは、パラリンピックへ統合する予定がない為に、2020年東京オ

オリンピック・パラリンピック開催時にも、デフリンピック競技は注目を浴びない可能性もある。それは、知名度にも直結し、人材の確保をより困難にさせる悪循環が予想されるからだ。

その為には、現在行われている大会等は引き続き行い、且つ新たな広報活動やイベントを行うことが重要であり、仮に一時的に大会規模の縮小等の憂き目にあったとしても出来る範囲内において、継続し続けることこそが最も効果的な活動であると言える。

謝辞：本稿を作成するにあたり、特定非営利法人日本デフバスケットボール協会の篠原雅哉理事長、ならびに会田孝行副理事長から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

#### 註

- 註1) 2015年第13回大会より、「全国デフバスケットボール大会」と改称。
- 註2) 身体障害者福祉法における聴覚障がい者の程度等級4級の判断基準の中に、両耳による普通和声の裁量の語音明瞭度が50%以下の者であり、両耳の聴力レベルは80dB以上のものと規定されている。
- 註3) ナショナルトレーニングセンター(現「味の素ナショナルトレーニングセンター」)は、スポーツ振興基本法に基づき、我が国におけるトップレベル競技者の国際競技力の総合的な向上を図るトレーニング施設として、平成20年1月21日に開所 <http://www.jpnsport.go.jp/ntc/gaiyo/tabid/56/Default.aspx> (平成27年12月1日閲覧可)
- 註4) 国立スポーツ科学センターにて、パラリンピックの選手・監督等を対象にした同施設(ハイパフォーマンス施設)の説明会並びに意見交換会を行った。(平成27年2月28日)

\* 「健聴者」を「聴者」, 「障害」を「障がい」と表記。

#### 引用文献

- 1) International Committee of Sports for the Deaf (2011) <http://www.deaflympics.com/about/> (平成27年8月1日閲覧可)
- 2) <http://jdba.sakura.ne.jp/> 特定非営利法人日本デフバスケットボール協会 (平成27年8月1日閲覧可)
- 3) 内閣府 (2006) : 障害者の社会参加促進等に関する国際比較調査, 内閣府.
- 4) 平成26年度「障がい者スポーツ競技団体協議会 JPC 加盟競技団体会議」資料, 資料18.
- 5) 中村有紀 (2009) : デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告, 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター報告書.
- 6) 平成26年度「障がい者スポーツ競技団体協議会 JPC 加盟競技団体会議」資料, 資料9.
- 7) <http://2015worlddeafbasketball.deafsports.org.tw/web/en/results/dailyresults/> (平成27年12月1日閲覧可)